ホステリングマガジン vol.37 / 2024 Summer

JAPAN Youth Hostels, Inc.

Hostelling Magazine

COVER INTERVIEW

渡部陽一

まずは"ひとつだけ"でいい。
相手のことを知ってみることから、
変えていこう。

この冊子は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。

ヤマザキ
ランチパック
たまご
ランチパック
ピーナッツ
ランチパック
ツナマヨネーズ
いつでも、どこでも、
おいしさは
あきらめない。
おいしいね、便利だね
Smartランチ
ランチパック

海外女子旅にはこの1冊でOK！

旅好き女子のためのプチぼうけん応援ガイド

地球の歩き方

aruco

人気都市ではみんなとちょっと違う
新鮮ワクワク旅を。
いつか行ってみたい旅先では、
憧れを実現するための
安心プランをご紹介。
世界を旅する女性のための最強ガイド！

全38タイトル！

ヨーロッパ	① パリ
	⑥ ロンドン
	⑮ チェコ
	⑯ ベルギー
	⑰ ウィーン/ブダペスト
	⑱ イタリア
	⑳ クロアチア/スロヴェニア
	㉑ スペイン
	㉖ フィンランド/エストニア
	㉘ ドイツ
	㉜ オランダ
	㊱ フランス
	㊲ ポルトガル
アジア	② ソウル
	③ 台北
	⑤ インド
	⑦ 香港
	⑩ ホーチミン/ダナン/ホイアン
	⑫ バリ島
	⑬ 上海
	⑲ スリランカ
	㉒ シンガポール
	㉓ バンコク
	㉗ アンコール・ワット
	㉙ ハノイ
	㉚ 台湾
	㉞ セブ/ボホール/エルニド
	㊳ ダナン/ホイアン/フエ
アメリカ/オセアニア	⑨ ニューヨーク
	⑪ ホノルル
	㉔ グアム
	㉕ オーストラリア
	㉛ カナダ
	㉝ サイパン/テニアン/ロタ
	㉟ ロスアンゼルス
中近東/アフリカ	④ トルコ
	⑧ エジプト
	⑭ モロッコ

今後も続々発行予定！

定価：本体1320円（税込）～
お求めは全国の書店で

aruco はハンディサイズなのに情報たっぷり！

旅のテンションUP！

point 1 一枚ウワテのプチぼうけんプラン満載

友達に自慢できちゃう、
魅力溢れるテーマがいっぱい。
みんなとちょっと違うとっておきの
体験がしたい人におすすめ

point 2 aruco調査隊がおいしい&かわいいを徹底取材！

女性スタッフが現地で食べ比べた
グルメ、試したコスメ、
リアル買いしたおみやげなど
「本当にイイモノ」を厳選紹介

point 3 読者の口コミ&編集部のアドバイスもチェック！

欄外には
読者から届いた
耳より情報を多数掲載！

Check! M.V. ス

すめ。 Check!

編集部からの
役立つプチアドバイスも

取り外して使える
便利な
別冊MAP付！

ウェブ&SNSで旬ネタ発信中！

aruco公式サイト
www.arukikata.co.jp/aruco

aruco編集部が、本誌で紹介しきれなかったこぼれネタや女子が気になる
最旬情報を、発信しちゃいます！新刊や改訂版の発行予定などもチェック☆

メルマガ配信中！
登録はこちら

arucoのLINEスタンプができました！チェックしてね♪

OK!! ありがとう！

Instagram @arukikata_aruco　X @aruco_arukikata　Facebook @aruco55

日本ユースホステル協会は日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟(Hostelling International)や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

こどもはおとなに。
おとなはこどもに、
なれる場所。

02 Cover Interview
渡部陽一
まずは“ひとつだけ”でいい。
相手のことを知ってみることから、
変えていこう。

08 Youth Hostel Pick up
乗鞍高原温泉ユースホステル
「人と人とのつながり」を紡ぐ
標高1,500mの温泉宿

12 Hostelling Magazine × 地球の歩き方
バルの美食に酔いしれる
スペイン、バスク地方の旅

16 鉄道写真家 櫻井 寛「列車で行こう!」

18 松鳥むうの晴れときどき旅びより

20 YH-GUIDE ユースホステルガイド
北海道 / 青森県 / 岩手県 / 宮城県 / 秋田県 / 山形県

※本誌の情報は2024年6月20日現在のものです。変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。

発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会　編集・発行人 寺島 眞
TEL.(03)5738-0546　〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1国立オリンピック記念青少年総合センター内

※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

Hostelling Magazine Cover Interview

Yoichi Watanabe

まずは”ひとつだけ“でいい。
相手のことを知ってみることから、
変えていこう。

PROFILE

戦場カメラマン

渡部 陽一（わたなべ よういち）

1972年9月1日、静岡県富士市生まれ。明治学院大学法学部法律学科卒業。学生時代から世界の紛争地域の取材を続け、戦場のリアルな声を伝えている。訪れた国や地域は130カ国以上にのぼる。これまでの主な取材地として、イラク戦争のほかルワンダ内戦、コソボ紛争、チェチェン紛争、ソマリア内戦、アフガニスタン紛争、コロンビア左翼ゲリラ解放戦線、スーダン、ダルフール紛争、パレスチナ紛争、ウクライナ情勢取材など。著書に「世界は危険で面白い」（産経新聞出版）「MOTHER-TOUCH　戦場からのメッセージ」（辰巳出版）「ぼくは戦場カメラマン」（角川つばさ文庫）「硝煙の向こうの世界 -渡部陽一が見た紛争地域-」（講談社）

旅人との情報交換が
戦場取材を支える土台になる

―戦場カメラマンとして世界各地の紛争地帯を巡ってこられた渡部さんですが、現地に滞在しているときはどんな宿に泊まっているんですか？

実は僕、ホステルやゲストハウスを本当に愛してやまないんです(笑)。20歳の頃から戦場カメラマンになり、限りある取材費の中でとにかく長く現地に滞在するため、利用するようになりました。現在51歳ですが、今でも利用しています。ホステルやゲストハウスの魅力は宿泊費がリーズナブルなだけでなく、何と言っても「情報」が呼吸を持ってうごめいているという点だと思います。長期間現地で暮らしながら、世界各地からやってきたアーティストやミュージシャン、バックパッカー、サイクリストなど、さまざまな職種の方々と、お互いの仕事のことやこれから向かう国や地域のこと、危機管理の方法、これまで訪れた旅先での経験を交換することができる。
そして、ホステルやゲストハウスには「情報ノート」と呼ばれるノートが置いてあることが多いんです。そのノートには世界中を旅するバックパッカーたちが記した膨大な情報が残されていて、現地の情報が少ない地域を取材するときには、このノートに記された情報が重要なライフラインになります。イラクの首都・バグダッドに向かったときは、隣国のヨルダンの首都・アンマンに滞在して、現地の情報ノートで情報を収集しました。ノートにはアンマンからバグダッドへの国境の越え方や、イラク国内のバスやタクシー、宿泊費の相場から、滞在費用を抑えるための交渉のコツなどが事細かに書き記されていたんです。そのノートと自分自身が持っている情報とを重ね合わせながら、国境を越え、前線に入っていきました。
僕にとって、ホステルやゲストハウスに集まる情報の一つひとつが、取材を支える土台になるんです。戦場報道において一番大切なことは「移動する力」です。必ずカメラを持って前線にたどり着くこと。たどり着いたら写真を撮り、撮った写真を必ず持ち帰り、発表し、世の中に届けること。この2つのことを実現する上で、世界中の情報ノートには本当に助けられました。戦場カメラマンとして前線に入るための動き方というのは、バックパッカーの「いかにコストを抑えて陸路で国境を越えるか」というノウハウに重なる部分がとても多いんです。

―旅人の情報がそんなふうに役に立っていたんですね！

とても重要な情報源なんですよ！もちろん、ただ情報をもらうだけではなくて、僕自身も感謝の思いを込めて、自分の持っている情報を一番新しい「呼吸のある情報」としてノートに書き残していました。インターネットが今ほど普及していなかった当時の情報ノートは、記入者同士がお互いをリスペクトし支え合う雰囲気があって、違う宿で同じペンネームの方の書き残した情報を見つけて「あ、この方、ここにも来てる！」ということも、あったり。また、その方と偶然出会ったりすると「あなたがその方だったんですね！あなたの情報にすごく助けられたんです！今持ってきた情報もありますので、一緒にご飯を食べながら話しましょう」…とすぐに意気投合できる(笑)。五感が密に絡み合う場所が、僕にとってのホステル・ゲストハウスなんです。

―これまでいろんな国や地域のホステルやゲストハウスを利用してこられたと思うのですが、特に印象に残っている宿はどこですか？

これはユースホステルではないのですが、20代の頃に滞在したウガンダの宿がとても印象に残っています。首都・カンパラのバス停を降りるやいなや、宿の仲介人のような人に「リーズナブルに泊まらせてあげるからおいで！」と連れていかれた先が、30人ほどのソマリアの難民が暮らすボロボロの避難宿だったんです。その宿は…とにかく…虫がすごく(笑)、ベッドの上にもたくさんの虫がいて…。「これはこのままこのベッドで寝たら大変なことになるぞ…」と、7畳ほどの部屋の中に持参していたソロテントを張って、テントで生活していたんです。とても大変な環境だった一方で、そこでの滞在が、僕にとっては取材そのものでした。同じ宿に泊まるソマリア難民の彼らがなぜ祖国を離れ、ウガンダに逃げなければならなかったのか、問題の背景を彼らとの交流を通じてとても深く知ることができたんです。そのときに「そうか、こうして一緒に生活することによって、そこで暮らす方々がたどってきた歴史や暮らし、思い、悲しみ、喜びを知ることができるんだ。これも取材のひとつの入り方なんだ」と気付かされたことを鮮明に覚えています。
また、その宿に滞在している間、難民の方々がいつも僕のテントに、ある料理を届けてくれたんです。その料理というのが、パスタなんです。ソマリアという国は、歴史上イタリアの植民地だったこともあって、パスタをよく食べるんです。ただ、私たちが普段レストランで食べるようなものとは違って、茹でたパスタに缶詰のトマトソースがほんのわずかにかかっただけなんですけど、そのパスタを初めて食べたとき「パスタって…こんなにおいしいのか！」と感動したんです。パスタそのものの味わいの深さを感じる料理で、あのときのソマリアのパスタのおいしさは今でも忘れられません。

―食べてみたい！でも、きっとそこでしか味わえないパスタですよね…。

これまでの取材経験の中で、いわゆる“良いホテル”に泊まったこともあるんです。清潔な部屋で空調が効いていて、バスタブがあってバスソルトなんかが置いてあるようなホテルです。快適ですし「せっかくだから」とバスソルトの入った湯船に浸かってみたりして(笑)。でも、確かに心地いいんですけど、突き抜けるほどのハッピーという感覚がないんです。ホステルやゲストハウスに泊まったときのワクワクやドキドキ、ソマリアの難民の方が作ってくれたパスタを食べたときの感動や熱量を超えることはありませんでした。

―そういった突き抜けるような感情や熱量は、若い頃の感度があったから体験できたものなのでしょうか？

年齢というよりも「初体験」ということが大きいと思います。「どこに宿があるかわからない」「価格も記帳の仕方もわからない」「何かトラブルに巻き込まれたらどうしよう」。当時の僕にとっては旅のすべてが初体験で、いろいろな感情が膨らんでいたから、体験できたのだと思います。一度経験したことは「きっとこういう感じだろうな」という知識と経験から、余裕が出てきますよね。余裕があるからできる楽しみ方もありますけど、ワクワクやドキドキを感じるにはジャンルを問わず「初体験」に挑戦することが大切なのだと思います。
ホステルやゲストハウスで過ごすときのある種の苦しみであり、喜びでもあるのが「暇で暇でしょうがない」ということです(笑)。でも、この「暇で暇でしょうがない」って、実は一番贅沢な時間だと思うんです。「暇で暇でしょうがない」から、みんなでリビングに集まって朝まで語ったりして、友人ができたりする。僕は何カ月も海外に滞在するようになるまで、自分から進んで本を読むことがなかったんです。でもある日、本当に暇で暇でしょうがなくて、ホステルの本棚に並んでいる日本語の小説を自分の部屋でパラパラと読んでみたんです。そうしたら、無意識のうちに集中していて、突然、活字が自分の中にギュッと染み込んでくるような感覚を味わったんです。「なんて綺麗な文章なんだろう」「なんて輝いている言葉なんだろう」「なんてわかりやすく書かれているんだろう」と。その感覚を味わうと、同じ本を何回も読むようになり、その作品のどんな部分に自分が惹かれているのか次第にわかってくる。そこから同じジャンルの小説や雑誌を読んだりすると、一定の周期の中で突然またギュッと文字が自分の中に染み込んでくる感覚があって。読書の面白さや活字の持つ力強さに気付けたことは「暇で暇でしょうがない」から得た最大の財産だと思っています。有り余る時間は、自分は本当は何が好きなのかに気付き、突き詰め、引き寄せることができる絶好のチャンスなのだと感じています。

人生を大きく変えた、
ジャングル奥地での出来事

―渡部さんは10代の頃はどんな少年時代を過ごされていたのでしょうか？

僕の故郷は静岡県富士市田子の浦という港町で、大学に進学する18歳までそこで育ちました。子どもの頃から父のカメラを借りて家族や友達の写真を撮るのが好きな少年でしたね。10代の頃は、1人で自転車に乗って旅をしたり、青春18きっぷを使ってひたすら遠くに行ってみたり。祖父母の家を訪ねたり、北海道や岩手、宮城、大阪、岡山、広島、九州…いろんな場所へ一人旅をする、そんな少年時代でした。

―その頃からすごい行動力の持ち主だったんですね！そんな渡部少年が戦場カメラマンという仕事を志すようになった“きっかけ”は何だったのでしょうか？

大学1年生のときに受けた生物学の講義で、教授が僕に「アフリカの中央部のジャングルには、いまだに狩猟生活を送っている『ムブティ族』という民族がいて、周辺のジャングルには言葉を理解するチンパンジーが暮らしているんだよ」という話をしてくれたんです。そのムブティ族の話を聞いたときに、ひっくり返ってしまいそうなほどワクワクしたんですね。「そんな民族が本当にいるのであれば、直接彼らに会ってみたい」と思い立って、すぐにアルバイトで貯めたお金で格安航空券を購入して、ジャングルへ向かいました。…とはいえ、日本からの直行便はないので、まずは飛行機で日本からインドに入り、インドから別の飛行機に乗り換えてケニアのナイロビへ。ナイロビからバスと乗合トラックを乗り継いでザイール（現在はコンゴ民主共和国）のムブティ族がいるジャングルへと向かっていたとき、ルワンダ紛争（フツ族とツチ族の民族衝突）に巻き込まれ、武装勢力から襲撃を受けた現地の子どもたちが、泣きながら僕に助けを求めてきたんです。でも…そのときの僕には、彼らを助けることができなかった。

「自分には何ができるんだろう」と考えたときに、子どもの頃から好きだったカメラで写真を撮ることで、過酷な状況に置かれ、今も泣いている子どもたちが世界にはいるんだと気付いてもらえるんじゃないか。たくさんの人に気付いてもらえたら、泣いている子どもが少なくなるんじゃないか…。頭に浮かんだのが、戦場カメラマンという職業だったんです。それから、僕の戦場カメラマンとしての道のりが始まりました。

戦場カメラマンになったばかりの頃は「オートボーイ」という当時8,000円ほどで購入したフィルムカメラを持って世界を飛び回っていました。でも、お金がなくて十分なフィルムが用意できず、撮れる写真の枚数には限りがありました。その上、僕は撮った写真をどこに発表すれば子どもたちの声を届けられるかもわからなかったので、がむしゃらに新聞社や雑誌の出版社の代表番号に電話をかけて「写真を見てください！ソマリアやザイールで泣いている子どもたちです！」と飛び込みで写真を持って行きました。しかし、1年経っても、5年経っても、10年経っても、僕の写真は1枚も使ってもらうことができなかったんです。

―10年間も…。なかなか結果が出ない中で活動を続けられた原動力は何だったのでしょうか？

日雇いのアルバイトでお金を貯めて、戦場に行って取材をして、帰国してまたアルバイトをしてという生活を送る僕に、写真の先生がこんなことを言ってくれたんです。「陽一、『石の上にも15年』だぞ。自分で納得をして、覚悟を決めた道なら、必ず毎日こつこつシャッターを切り続けていきなさい。必ず毎日、いろんな写真を見続けなさい。こつこつ写真を続けていけば、必ず15年という歳月が過ぎたとき、自分がイメージをした目標を足元に引き寄せることができるはずだから」と。

そして、この「石の上にも15年」という先生の言葉を信じて活動を続けた結果、僕が35歳になる少し前に、生まれて初めて日本の週刊誌の見開きのグラビアページで、ソマリアで泣いている戦場の子どもたちの写真を掲載してもらうことができたんです。本屋さんに雑誌が積み上げられているのを見たときは「先生が言っていたことは本当だったんだ…。アフリカの子どもたちの声を、やっと届けることができた！『石の上にも15年』は本当だったんだ！」と、身体が武者震いのようにブルブルと震えて、呼吸がうまくできなくなるほど感動したことを覚えています。すぐにその本屋さんに並んでいる雑誌を5冊ぐらい買って、駅のキオスクでも2冊買って、また別の本屋さんでも買って（笑）、両親、友人、そして写真の先生に届けました。もちろん、僕自身も大切な原点として「石の上にも15年」という言葉と共に大切に保管しています。

―もし「渡部さんのように戦場カメラマンになりたい」という思いを持って、若者が戦場に向かおうとしていたら、どのように声をかけますか？

僕は戦場カメラマンとして、戦場カメラマンになることを人に勧めることは絶対にありません。ただ、自分で考え、納得をして、覚悟した道が、いろいろな職種がある中で戦場カメラマンの道というのであれば、危機管理や世界各地に関する情報、写真の撮り方など、伝えられることはあると思います。どんな職業であっても、自分が納得した道を、自分なりのスタイルで、安全を足元に引き寄せながらこつこつと進んでほしいと思っています。

戦争のない世界への第一歩は相手のことを知ってみることから

―危険な地域をたくさん旅してこられた渡部さんに、安全に旅をするためのアドバイスをぜひいただきたいです！

まず1つ目は、夜に出歩かないことですね。これは特に海外で過ごすときの危機管理の基本です。もちろん、海外にも夜出歩いても安全な場所はたくさんありますが、知らない地域・場所では、基本的には日が落ちる前に宿に戻ることが身を守る上で重要です。

そして、2つ目。旅先での出会いはとても素敵なものですが、初対面の人との会話で「お金」に関する話題が出たときは要注意です。相手がどんなに優しくて、人当たりの良さそうな人に見えたとしても、お金の話がポロポロと出たときには一歩引くようにしてください。観光地には旅行者のお金を目当てに寄ってくる人たちもいます。気を付けてください。

3つ目は、お財布を持たないこと。お金はいろんな場所に分散させておいて、すぐに出せるようにすることが危機管理において有効です。「綺麗なお財布はトラブルを引き寄せる」といわれるくらい、旅先でお財布を見せるとまるで撒き餌を撒いたように、いろいろなトラブルが集まってきます。現地の人と交渉をしたり、買い物をするときに、お財布からお札を出して枚数を数える、なんてことはしないようにしてください。

―なるほど！とても参考になります！

基本的な心構えとして「犯罪のプロには敵わない」と理解することが大切です。彼らはものすごく旅行者のことを見ています。こちら側が徹底的に対策をしたつもりでも、プロはそれを超える技を組み立ててくるので「プロには敵わない」という意識を持っておくと、旅先での動き方が変わってくると思います。

ただ、過度に警戒しすぎてしまうと、旅を楽しむことができません。特に海外を旅するときには、わからないことも多く、緊張してしまう部分があると思います。そんなときは、現地の人にその国の言葉で自分からあいさつをしてみてください。現地の言葉で「こんにちは」と伝えると、緊張していた空気がまるで何もなかったかのようにとろけて、途端に相手が笑顔になります。あいさつは緊張感を和らげてくれるスイッチとしてとても有効な手段なので、ぜひ試してみてください。

―最後に、どうしても聞いてみたかったことがあります。歴史を振り返ると人類は戦争を繰り返してきていて、今、世界を見渡しても変わらず戦争が起こっています。「もう人類は“戦争のない世界”を作れないんじゃないか？」とも思ってしまうのですが…、どうすれば戦争のない、平和な世界に近づくことができると思いますか？

世界中で起こっている戦争には、さまざまな理由があります。国境であったり、民族であったり宗教であったり、水やエネルギー資源を巡った戦争もあります。ただ、理由はさまざまでも「まずはひとつだけでいい。相手のことを知ってみること」が重要だと僕は思っています。「どうしてこの国はこういうことを考えているんだろう」「イスラム教ってどんな宗教なんだろう」「ガザ地区の人たちはどうして泣いているんだろう」「イスラエルの人たちはどうしてこんなに強硬に攻撃を仕掛けるんだろう」など、もちろんお互いのことを知っているからこそ戦争が起こるんですけど、戦争の背景にある入口を知るだけで、肩の力を抜いて柔らかく相手に寄り添っていける感覚が染み込んでいくはずです。これが、世界から衝突を徐々に止めていくための入口になっていくと思います。

今、戦場の最前線で起こっていることは、家族や子どもたちを目の前で殺害されるという、血を巡る報復の連鎖です。外交や人権や倫理や道徳、エネルギーが国境問題というものをすべて凌駕して、怒りと悲しみが報復の連鎖を生み出しています。戦いを止めるためには、まずお互いの入口を知って、声を聞く。そこから戦闘を止めていく交渉の選択肢を広げていく。その入口を多くの人に届けていくのが、僕の使命だと思っています。

読者プレゼント
抽選で 戦場カメラマン渡部陽一著『晴れ、そしてミサイル』を3名様にプレゼント！
ご応募は日本ユースホステル協会ホームページの専用お申し込みフォームから！
http://www.jyh.or.jp/hm
応募〆切：2024年8月末日
※当選者にはご応募時にご登録いただいたメールアドレス宛にご連絡いたします。@jyh.or.jpからのメールが受信できるように設定をお願いいたします。

日本ユースホステル協会は日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟(Hostelling International)や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

こどもはおとなに。
おとなはこどもに、
なれる場所。

Hostelling Magazine vol.37

Cover Interview
渡部陽一
まずは"ひとつだけ"でいい。
相手のことを知ってみることから、
変えていこう。
P.02

Youth Hostel Pick up
乗鞍高原温泉
ユースホステル
「人と人とのつながり」を紡ぐ
標高1,500mの温泉宿
P.08

Hostelling Magazine
×地球の歩き方
バルの美食に酔いしれる
スペイン、バスク地方の旅
P.12

鉄道写真家 櫻井 寛
「列車で行こう!」
P.16

松鳥むうの
晴れときどき旅びより
P.18

YH-GUIDE
ユースホステルガイド
北海道 / 青森県 /
岩手県 / 宮城県 /
秋田県 / 山形県
P.20

Hostelling Magazine vol.37
まとめてダウンロード

※本誌の情報は2024年6月20日現在のものです。変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。

発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会　編集・発行人 寺島 眞
TEL.(03)5738-0546　〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1国立オリンピック記念青少年総合センター内

※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。